

歴史から学ぶ比較思想の可能性

——日本近世における宗教関係を手掛かりに——

保坂俊司

数年前までの国際社会は、世界を二分していた冷戦構造の終結とともに、かつての対立構造を生み出していたイデオロギー（政治経済体制の相違を重視する思想体系とその体制）対立が終焉し、IT技術の急激な進歩や、経済的な世界一元化などのグローバル化と呼ばれる現象によって、来るべき平和社会の現実を期待させた。しかし、高度情報化時代による政治や経済、更に日常レヴェルの文化的なグローバル化が、急速であればあるほど、その反作用も深刻となった。つまり、政治的には急激なグローバル化により、返って民族主義的な集団が台頭するという皮肉な現象が世界レヴェルで引き起こされて来たし、経済世界においては、僅か一パーセントの超富裕層が、九九パーセントの人々の富の総計を上回るというような極端な富の偏りを生み、あるいは世界的な文化の均一性への経過期間などから、返って反グローバル化現象への共感が、世界的な規模で巻き起

こっている。

いわゆる世界の保守化傾向ということである。尤も、この保守化といっても多様な様態を呈しているが、筆者が危惧しているのは、この保守化現象の根拠としてイスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教、神道などのいわゆる宗教への原点回帰、より具体的には自己正当化、あるいは自己防衛のためにそれぞれが帰属する宗教を恣意に使うとする傾向である。つまり、グローバル化という近代西洋文明的な政治、経済領域におけるような世界の一元化傾向に対して、それぞれの地域の特性を主張してゆこうとするいわば地域主義、ローカリズム的な発想、つまり宗教民族主義ともいえる保守化の現象である。

本来両者はバランスを取りながらゆっくりと進むことで、いわば地域社会の拡大がなされ、最終的にはグローバル化が達成できる、ということになるはずである。事実人類の歴史は、そ

れを物語って来た。しかし、あまりにも急激なグローバル化と、グローバル化とはいつてもその実は、新たな西欧近代文明化、特にアメリカ型文化の世界拡散現象という傾向がある現在のグローバル化の限界が、最も顕著な形で生じ、また深刻化しているのが他ならぬ宗教紛争である。というのも西欧近代文明の基層部分には、キリスト教の教えが盤石に存在するのである。

それ故に、グローバル化とは、すなわち西洋近代文明化であり、その基礎にあるキリスト教的文明の拡散であるともいえる。ともあれ、グローバル化とは、異なる宗教同士の間での濃密な文化、文明の出会いを急激に伴う現象である。従来ならば宗教観の接触は、これほど急激なものではなかったはずであるが、グローバル化の時代には、人、物、情報の交流は、いやが上にも日常生活の隅々にまで押し寄せてくる。これは明らかに、一般的な人間の対応力を超えるものであり、人々はこの情報の洪水に、きちんと対応できずにいる。

しかし、如何に大きな齟齬があろうとも、既に始まった大規模なグローバル化はもはや止められない。いな止めるべきでもない。なぜなら、有史以来グローバル化は人類の進歩の源であるからである。要は、このグローバル化に即した相互理解の思想の構築が遅れているということである。つまりこの問題の解決には現代社会の構成員、特に我々思想家が努力することが不可欠である。そのためには、まず他者を知ることが重要となることは論を待たないが、ただ単に知識量を増やすことでは、そ

の目標は達成できないであろう。なぜなら、それは単なる思想レヴェルの対決のみならず、日常生活における政治、経済、文化など学際的な要素からの分析が不可欠となるからである。

このような広範かつ真剣な思想の対決、あるいは比較は可能なのであるか？ この問いに答えることは、決して容易なことではないが、しかし、それを実現するために努力することが、ある意味で比較思想学の役割ではないだろうか。しかも、日本人としてこの問題の対応をしようとする時、如何なる可能性があるのか。そのように考えた時、我々は歴史の中にその事例を求めることで、そのヒントを得ることができるのではないだろうか。

つまり、日本における宗教対話、対決の事例としてのキリスト教、あるいは神・儒・仏三教間の動きである。これらは思想的・宗教的であるのみならず政治・経済的な要素が絡み合い複雑な様相を呈してきたが、それ故にまさに真剣な思想対話でもあった。故に、その思想的な動きから学ぶ所は大きいといえる。

宗教対立・紛争が激化する昨今の世界情勢の中で、日本思想が育んで来た宗教共存の知恵の探究は大きな意味を持つのではないだろうか。

(ほさか・しゅんじ、比較思想、中央大学教授)